

2020年7月5日 大井バプテスト教会 礼拝説教

説教題「キリストに出会う場所」フィリピの信徒への手紙3章12～16節

主任牧師 加藤 誠

「いずれにせよ、わたしたちは到達したところに基づいて進むべきです」(フィリピ3・16)。

新型コロナ・ウィルスによって、私たち大井教会は今、二つの大きな戸惑いの中を歩んでいます。一つは、これまで当たり前のようにみんなで集まり、ささげてきた主日礼拝が守れない。「三密を避けよ！」と制止されて、「共なる礼拝」を三か月間休まざるを得なかった。「ようやく再開できる！」と思ったものの、「分散礼拝」という形で、みんな一緒には集まれない。それぞれの教会員は二週間に一回しか集えない。先週、ネヘミヤ書7章から「主を喜び祝うことこそ、あなたがたの力の源である」という言葉を受けたわけですが、教会という信仰共同体にとって「力の源」である「共なる礼拝」をこのような形で分散させられ、制限されて、これからどうしたらよいのだろうか…という大きな戸惑いを抱えて今、私たちは歩んでいます。

もう一つの大きな戸惑いは、新礼拝堂建築のことです。いよいよ施工業者との契約と言う時に「待った！」がかかったわけです。「神さま、どうしてですか。あなたの御心はどこにあるのですか」。特にこの三か月間、新礼拝堂委員会の方々が背負った深い苦悩と心引き裂かれるような痛みを考える時、私は何度神さまに物申したいと思ったことか。でも神さまから明確な答えが示されるわけではなく、苦しみ考え続けざるをえないわけです。人の集まりとしての教会のもろさと弱さの中に、「神さまは何を語りかけておられるのだろうか？どのように新礼拝堂建築を考えたらよいのだろうか？」という大きな戸惑いと不安の中を、私たちは今、歩んでいます。

一つ目の戸惑い、共なる礼拝ができない、制限される戸惑いをどう考えたらよいのか…ということでは、先日、カトリックの晴佐久昌英神父の話聞き、考えさせられました。「教会には『骨の教会』と『肉の教会』があると思う。『骨の教会』は組織、システムとしての教会であり、『肉の教会』は一人ひとりの心や体に息づいている教会。『骨の教会』は、感染拡大を避けるために共に集まることや会議を断念するけれど、それで『肉の教会』がなくなるわけではない。一人ひとりが神さまと結びつき、自分のすぐ周りの隣り人を思い、声をかけたり、喜びや悲しみを一緒に分かち合うという『肉の教会』は働きを続ける。今回のコロナは、私たちの信仰とか祈りがどのような質のものであるかを問うているのではないかと。

今回のコロナで「見える教会の共なる礼拝」ができなくなった時に、「見えない神とのつながり」がどれほど自分の生活の中に肉となっているか。そして大切に

ただいた「神さまの恵みのつながり」が、わたしの暮らしの中で「すぐ近くの隣り人とのつながり」にどんなふうに肉となって生かされているか。そこに『肉の教会』の働きがかかっている…ということなのでしょう。そういう意味で考えると、大井教会はこの建物に集まることは制限されるけれど、教会員一人ひとりがそれぞれの暮らしの中に『肉の教会』の働きを生かし、広げていく可能性は無限大に与えられているのかもしれませんが。このコロナ禍の中であって、主イエスと共に歩む喜びが、誰か一人を覚える祈りに重ねられていくことを祈り願っていきたいのです。

もう一つの大きな戸惑い、新礼拝堂建築については、先週日曜日の午後に開かれた「教会のこれからを語り合おうⅡ」でのある方の言葉が、わたしの中で小さな渦となって、いろいろと考えさせられています。その方の言葉については巻頭言を参照いただきたいのですが、わたしが受け止めたことと言えば、私たちが自分たちの信仰の貧しさと限界を思い知らされ、ペしゃんこにさせられたところが、しかしキリストとの新しい出会い、出発の場所、そしてキリストの復活の命を体験していく場所になる！…ということです。

今朝、ご一緒に開いたフィリピの手紙3章で、パウロはこう語っています。

「わたしは、既にそれを得たというわけではなく…何とかして捕えようと努めているのです。自分がキリスト・イエスに捕えられているからです」、「いずれにせよ、わたしたちは到達したところに基づいて進むべきです」(フィリピ 3:12、16)。

ここで、パウロが何とかして「捕えよう」と願っているのは「キリストの復活」です(3:11 参照)。ただし、そのキリストの復活にいたるには、キリストの苦しみにあずかる必要があることをパウロは知っていました。

キリストの苦しみにあずかることなしに、キリストの復活の命を知ることは無い。これはとても厳しい言葉です。

新礼拝堂建築のことに重ねるなら、今回のコロナで私たちの教会の財政的課題も厳しく突きつけられている中、果たしてどのように新礼拝堂をささげていくことができるのか。自分たちのもろさ、弱さとも向かい合わされて、大きな疲れを覚えている私たちがいるわけですが、もし私たちの中に「この建築を通して、あなたの御名をあがめさせてください。キリストの復活の命にあずからせてください！」という祈りがあるなら、今、経験している厳しさの中に、必ず神さまが復活の希望を見せてくださることでしょう。

「神さま、助けてください！」「あなたなしには私たちは一步も動けません」という祈りを絞り出さざるを得ない場所、そこがキリストの復活の命を知らされ、体験していく場所になるという希望を一緒に見つめていきたいのです。